

# 教育センターだより

第15号



目	次
常に学ぶ教師の姿勢を	1
教育研究部	
経営研究室	2
教科研究室	2
教育相談研究室	3
教育工学研究室	3
科学技術研究部	
理科研究室	4
技術家庭研究室	4
研修員とテーマの紹介	5
告知板	6



## 常に学ぶ教師の姿勢を

センターはその交流の場

所長 草 薨 幸太郎

旧教育研究所、旧理科教育センターが、昭和44年12月に統合し、新たに秋田県教育センターとして発足してから5年5か月経過しました。その間、教職関係職員の資質の向上と指導力の向上をめざして、研修（現職教育）、研究、各種の資料提供、教育相談等の事業を遂行してまいりました。

今年度も今までの講座を反省し、受講者のアンケート等を参考にしては、内容の改善につとめ、幼・小・中・高あわせて89講座を計画し実施中であります。

児童・生徒の授業に対する集中力、可能性にしても教師がそれを引き出さなければなりません。そのために教師は専門家として十分な知識を持つ必要もあるでしょうし、際限のない工夫（創造）をする必要もあります。こういう意味で教師の責任は大きいと思います。

私は現場で、先生方に強調した事項の一つに、授業に力を結集することにつとめてほしい、そのためには常に研修する教師であり、常に学習指導法の研究を怠らない教師であってほしいと言いつけてまいりました。よく教えるためには、よく学ばなければいけないし、どん欲に学ぶ教師こそ教職専門家と考えるからであります。

時代の流れとともに、学校教育にも新しい問題が次々と持ち上がっております。本県教育の充実と振興を図るため、県内教育関係者は日常かかえている問題を持

ちより、その解決の場とされ、さらには、心の交流の場として広く利用されますことを念願しております。

50年度秋田県教育センター研修講座一覧は各校に配布済みであります。研修（現職教育）の内容は主要次のとおりであります。

1. 学校・学級経営に関するもの
2. 一般教科（理科、技術・家庭科および家庭科を除く）に関するもの
3. 教育相談・生活指導・特殊教育に関するもの
4. 理科教育に関するもの
5. 技術・家庭科教育および家庭教育に関するもの
6. 長期研修に関するもの（小5名、中7名、高4名、特殊1名）

なお、事業として上記研修事業のほかに研究事業（学校・学級経営の合理化・能率化に関する研究、学習指導の改善に関する研究、教育工学に関する研究、教育相談・生徒指導および特殊教育に関する研究、理科教育の現代化ならびに指導資料の作成に関する研究、技術・家庭科および家庭科における学習指導改善に関する研究、所員・研修員の研究成果を「研究紀要」「研修集録」等として刊行するほか、発表会を開催）奉仕事業（問題をもつ子どもの個別相談、必要な心理治療など）を行っております。

現場とともに  
——各研究室の構想——

研修講座の充実を図るために

経営研究室

これまで、講座のたびごとに、受講された先生方から当該講座に対するご意見、ご希望等をお寄せいただき、これを手がかりとして次年度の講座を企画してきた。本年度は特に次のことに留意して内容の充実を図ることとした。

- ▷ 県外講師の招へいと、教育関係者外からも講師を求め、コクのある内容を盛り込み、その聴講にあたっては、小中教務主任対象の講座と小中高新採用教員対象の講座、小学校学年主任対象講座と中学校学年主任対象講座、高校新任教頭対象講座と高校学年主任対象講座を、それぞれセット方式にし、招へいた講師の講演を合同で聴けるよう工夫した。
- ▷ 県が掲げている「ひとりひとりが生きる魅力ある学校」の構築を図るため、強調したいことは、学校の教育目標の設定過程であり、目標具現の実践過程であり、評価活動過程である。これらの内容を重点的に講座に取り上げたい。
- ▷ 戦前の教育行政は管理・監督の色彩が強かったが、戦後は民主的な教育行政へと転換してきた。しかし、法規や制度が民主的方向をたどっていないながら、なおスッキリしない原因はどこにあるのだろうか。民主社会は、一面では社会規範の共通認識のもとで秩序を確立・保持することによって成り立ち、発展するものであろう。そこで希望の多い服務の問題を新しい視点から取り上げることにした。
- ▷ 学校参観を組み入れ、教育実践に即した内容を企画している。へき地教育の講座では県指定校(複式指導)秋田市立八田小を6月19日、新採用教員の講座では横手市立横手北小・横手南中を9月2日に見学することにしていく。51年度は本県で全国へき地教育研究大会が開かれるため、その盛り上がりも大であり、研修講座の成果が期待される。一方、横手では、全員同じ宿舎に2泊し、受講者相互の親ほくを一層深めることもできるのでこれまたその成果を期待したい。

秋田県の歴史編の編集はじまる

教科研究室

郷土教育資料(地理編)「ひらけゆく秋田」(昭和49年度刊行)にひき続いて、本年から2年がかりで「歴史編」の刊行を計画している。このシリーズは、昭和43年度刊行の「秋田県地誌」など一連の学習指導資料であって、郷土秋田の学習に活用いただきたい。



50年度の研修講座は下記のように計画した。

	小学校	中学校	高等学校	計
国語	1回(50人)	1(40)	1(30)	3(120)
書写	3(120)	3(120)	0(0)	3(240)
社会	1(60)	1(40)	1(30)	3(130)
数学	3(90)	4(120)	1(20)	8(230)
音楽	2(30)	1(15)	0(0)	3(45)
美術	2(30)	1(15)	0(0)	3(45)
英語	0(0)	2(24)	1(20)	3(44)
計	12(380)	13(374)	4(100)	26(854)

※ 毛筆書写実技研修講座は小・中学校合同で実施されるので、合計講座数は26となる。毛筆書写講座は、一応本年度で終り、明年度は高校芸術科の書道を計画する予定である。また毛筆書写・算数・数学の三講座は、従前どおり、北地区・中央地区・南地区で開催されることになっている。各講座とも、教科指導上の課題解決と、学習指導改善の方途を求めて研修内容を精選しているが、受講者の希望や意見も参考にしながらより充実した内容にしたいと考えている。

本年度の担当は次のとおりである。国語・書写(佐々木清)、社会(藤森健司)、算数数学(石郷岡元)、音楽(進藤史生)、図工美術(渡辺昭次)、英語(菊地昭男)。

## 情緒障害児への治療実践進む

自閉症研究に拡大

教育相談研究室

## 相談業務

昨年度 200 ケースの治療活動を通して学校恐怖ほかの情緒障害児研究は大きく前進し、スタッフの意気高らか。本年度はそのほかに、自閉症研究を強化する。現在籍 7 名の自閉症児と格闘中だが、もっとケースが欲しい。身近にそれらしい子がいたら、ぜひ保護者に紹介し、来室をすすめて下さい。

そんな子たちが、一つ一つ人間らしさを見せてくる姿が、スタッフの生きがい。



学校恐怖の子たちも、新学年次々と再登校。新規来室受け入れの準備完了。その他どんなケースでも紹介を乞う。(6 ページ参照)

## 研究業務

進路指導研究は「保護者の役割」解明の三年次め。来年度完結を目標に、担当の木村は、目下、因子分析という難作業に大多忙。

「親子の人間関係」研究は二年次め。「親子関係診断検査」「Y-G 検査」を、本年は中 2 に。なお、この研究は、県内各地区研究所の共同研究となる。担当は向山から熊谷にバトンタッチ。

幼児教育研究も二年次めで本年完結予定。「五歳児教育の可能性と限界」の追求段階にはいり、担当の板垣は、ぼう大な資料分析に奮闘中。

冒頭の「自閉症」研究は品川・原の担当。

全員、相談・研修業務のあいまを縫っての作業。

## 研修業務

昨年どおり「生徒指導」「進路指導」「特殊教育」が柱。そのランチとして「カウンセラー養成」「検査技術」研修にも力をいれる。

いずれも、単なる知識の授受に終わらず、子どもを見る目を養い、つきあい方の体得をめざしている。

## キャッチフレーズ

スタッフの精神衛生が悪いと子どもは治らない、常に語り、自己を抑圧するな。

抽象論で子どもは治らない。まず動き、子と逢おう。

## 教育の現代化をめざして

教育工学研究室

本年度、教育界の大きな期待を背負って、当センターに「教育工学研究室」が産声をあげた。

教育工学というと、「工学」が教育の機械の面を研究するという印象を与え易いが、そうではない。ひとりひとりの力を伸ばし、確かな力を身につけ、行動化していくための諸要素を分析、解明し、学習指導のシステム化を図っていくもので、その中にハードな教育機器が一媒体として登場するのである。

機器操作がたんのうであること、即学力の確かな定着にはならないだろう。ハードとしての機器は、学習指導の分析によって、はじめて位置づけられるのであって、機器に振り回されても困ることだ。

そこで、本年度からの研修講座には、児童・生徒ひとりひとりに確かな学力を身につけさせるための学習指導改善の基礎理論、演習を主とした教育工学基礎研修講座ⅠⅡⅢと、機器に対するソフトウェアの制作をねらいとする教育機器教材制作研修講座を開講した。このほか、他室の講座に教育工学的内容がもらえ、出向担当することもかなりの回数になるようだ。また、県内各地教委から要請される随時研修も、ますます多くなることが予想される。

教育工学研究室は、このような現場の要望にこたえべく研究も深めなくてはならない“忙に歓(閑)あり”このような心境で前進したいと考えている。

## 現場の声

## 教育工学研究室への期待

秋田市立川尻小学校教諭 仙葉宗雄

本校では、市教委の研究委嘱をうけ「教育機器導入による学習指導法の改善」(理科、社会)をテーマに研究を進めている。その実践の中で重視していることは、児童の主体的な学習の指導過程である。機器は一つの教育媒体であり、活用即有効ではないと考える時、教育工学研究室の誕生は現場の指針となるものであり、これからの実践に力強さを感じさせられる。

今後、教育工学研究室は、学校現場と一体となって学習指導の改善を図るとともに、教育機器の位置づけかた、効果的活用方法などの研究を進められることを望むとともに、その研究成果を期待している。

## より実態に即した研修を

理 科 研 究 室



理科研究室で、今年度実施予定の研修講座の種類は昨年度と同じであるが、その内容、実施のしかたなどについては、昨年度の反省、受講者のアンケートなどをもとにして、学校や、児童生徒の実態に、より即したものになるように考えている。半数以上の講座が、昨年度と別の内容を取りあげているが、そのなかで特に変わったものとして、次のようなものがある。

小学校理科研修講座。これまで、受講者の担当学年を指定していなかったが、今年度は計4回実施されるうち、はじめの2回は4、5、6学年の担当者を対象にして化学、地学的内容を、あとの2回は1、2、3学年の担当者を対象にして物理、生物的内容を取り上げることにした。こんご、さらに実態に即した担当学年別の講座になるようにしたい。

小学校理科野外観察研修講座（生物）。今年度から乳頭山を会場として、1泊2日で実施することにした。野外観察の手引き（生物編）の完成を機会に、先生方に森林の生態・分布などについても研修してもらい、併せて自然に親しんでもらうことをねらいの一つにしている。

理科教育講座。今年度は、6月と10月に3日間ずつ、2回に分けて実施することにした。そのうち10月の3日間の中に、課題研修を2日間予定している。これは受講者が日常の理科教育実践の中で疑問を感じたり、もっと詳しく調べてみたいと感じたりした事項の中から適当なものを選び、研修しようというものである。

以上のほか、小・中学校理科基礎講座（ガラス細工 岩石プレパラート製作）では、年々受講者が減り、実施方法の再検討を要するものもある。併せて意見、希望等をできるだけ多く寄せていただきたい。

## あすの授業に役立つ講座

技術家庭研究室

……………この機械の使用については、これまでよくわからなく我流の操作でやってきました。それだけに一度手ほどきをしてもらいたいと念願していました。今回の講座は短い期間でしたが基礎的なことから、かなり高度な事柄まで親切に指導してもらうことができ本当に有意義な講座でした。

2学期からは自信をもって指導できると思います。  
——教材講座アンケートより——

48年度から技術・家庭科教材研修講座を実施している。この講座はすぐ授業に役立つことをねらいとし、希望者を対象としている。内容等は学校に配布される研修講座一覧表に記載されているが、今年度の内容は次のとおりである。諸先生の積極的な参加をお願いしたい。

木材加工……木工機械の点検や操作を中心とした安全管理面や、新しく導入したコーナーロッキングマシンやルーターマシンなどを使っての教具資料の作製を計画している。

金属加工……旋盤の点検・操作を主として行い、旋盤の使い方に慣れていただくことをねらいにした。製作する題材は、公差の学習指導に利用できる限界プラグゲージである。

機 械……ガソリン機関かディーゼル機関のうちいずれかを選択して、その本体の分解・組み立てを行い、整備の方法について研修する。また機関各部の調整の方法についても研修することになっている。

電 気……トランジスタを使った増幅回路を塩ビ板の上につくり、そのまま実験板としても使用でき、またOHPを使って回路の説明にも利用できることをねらいとした。製作後、各自のセットで実験も行う。

被 服……48、49年度に引続いて本年は3学年の実習題材であるワンピースドレスをとりあげた。県版型紙を用いて、製作工程の分析をし、能率的に要点をおさえながら実物の製作をすることになっている。

食 物……身近な食品をタール色素の検出とその色素名の確認など実験やスライドにより食品添加物全般について理解を深めていただくことをねらいとした。

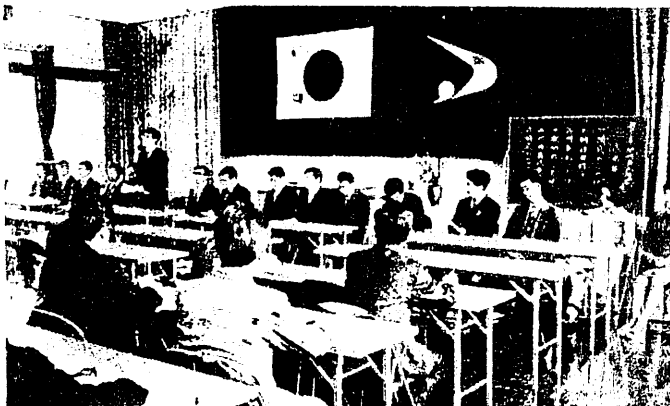
揚げ物については、素揚げ、てんぷら、フライ、フリッターなどの実習を主体に行う予定である。

## 昭和50年度研修員とテーマの紹介

本年度の研修員入所式が、5月1日に当センターで行なわれました。

全県の小・中・高校からおいでになられた16名の先生方は、現場のフレッシュな感覚で緻密な研修計画をたてられ、毎日熱心に研修されています。

この後、研修員は5月



から9月まで、テーマ検討会（5月中旬）、経過報告会（8月12日）、成果報告会（9月16日）と多忙な日々を過ごされます。

次に、研修の成果を祈りつつ、研修員と研修報告テーマを紹介いたします。

## — 経営研究室 —

- 本荘市立石沢小学校教諭 田口 栄二  
小学校における学年、学級経営について  
——主として本荘・由利地区の学年経営に対する意識について——
- 角館町立角館中学校教諭 西宮 陽助  
中学校における学年経営の実態と問題点についての考察  
——学年経営の計画と学年会の組織について（大曲市・仙北郡を中心に）——

## — 教科研究室 —

- 鷹巣町立鷹巣中学校教諭 堀口 喬夫  
図形の位相的な見方、考え方の指導  
——中学校3年の位相教材の取り扱いを中心にして——
- 秋田市立四ツ小屋小学校教諭 神部 和夫  
器楽指導を通して表現能力を育てるにはどうあればよいか
- 秋田市立明德小学校教諭 三浦 勝博  
小学校図工科における紙を素材にした立体教材の取り扱いについて  
——素材の可能性と技法について——
- 横手市立横手南小学校教諭 亀谷 正毅  
小学校社会科における地域学習の指導法に関する一考察  
——単元「市のようす」、「市の人々の仕事」における副読本の効果的活用を中心に——
- 県立大館桂高等学校教諭 佐藤 正  
文学教材の指導についての一考察  
——小説教材の主題把握のあり方を中心に——

- 県立由利高等学校教諭 吉田真寸子  
LL学習における生徒の自己矯正能力について

## — 理 科 研 究 室 —

- 大館市立成章小学校教諭 内藤 捷美  
小学校「光」教材の検討  
——光を量的にとらえる方法の吟味と工夫——
- 若美町立湯西中学校教諭 小松 一夫  
中学校における呼吸実験について  
——マノメータを中心にして——
- 湯沢市立湯沢北中学校教諭 高橋 一義  
物質分離を指導するための一考察  
——沸点のちがいによる分離——
- 県立五城目高等学校教諭 嵯峨 二郎  
森山火山岩類についての考察

## — 技術・家庭研究室 —

- 能代市立東能代中学校教諭 芳賀 忠昭  
切削のしくみを理解させるための実験装置のくふう  
——平かんなを中心として——
- 男鹿市立男鹿東中学校教諭 佐々木保男  
金属材料の指導についての一考察  
——炭素鋼を主として——
- 大曲市立大曲西中学校教諭 古屋 祐一  
機械のしくみを理解させるためのくふう  
——つりあいおもりと、はずみ車を中心に——
- 県立西目農業高等学校教諭 根岸 俊子  
鶏卵の調理学習における問題点について

## 告 知 板

## 人 事 異 動

## ☆ 転任

所長 小田島邦夫 秋田高校長へ  
 科学技術研究部長 又井阿素雄 県立図書館長へ  
 総務課長補佐 赤羽 武俊 指導課長補佐へ  
 庶務係主事 成見 甫 総務部統計課主事へ  
 " 三浦千鶴子 日新小学校主事へ  
 調査統計係長 大和 進 福利課貸付係長へ  
 " 主任 阿部 茂夫 県立博物館係長へ  
 " " 今田 猛 総務課主任へ  
 " 主事 藤本 敬幸 " 主事へ  
 " " 石沢 直隆 " "  
 教育相談研究室長 渡辺 俊雄 五城目小学校長へ  
 理科研究室長 藤井 光郎 秋田北高教諭へ  
 指導主事 鈴木 昌 秋大附属中教諭へ  
 " 山本 隆 秋田東高教諭へ  
 " 伊藤 弘四 秋田養護学校教諭へ  
 " 百木 史郎 湯沢高校教諭へ

## ☆ 新任

所長 草薨幸太郎 大曲工高校長から  
 科学技術研究部長 佐々木市郎 秋田工高教諭から  
 総務課長補佐 伊藤 守一 教育庁総務課主査から  
 管理係長 伊藤 茂雄 " 主任から  
 指導主事 小島 貞明 秋田北高教諭から  
 " 石郷岡 元 秋大附属中教諭から  
 " 藤森 健司 秋田高教諭から  
 " 熊谷 幸正 駐在指導主事から  
 " 品川 大 秋田養護学校教諭から  
 " 横山 侑 秋田工高教諭から  
 長期研修生 原 香子 県立ろう学校教諭から

## ☆ 所内

教育相談研究室長 向山 清 指導主事から  
 教育工学研究室長 吉富庸四郎 " (経営研究室)  
 理科研究室長 田沼 浩三 "  
 管理係主事 佐藤 実 庶務係主事から  
 " 浅利ケイ子 調査統計係主事から

## 機構の変更

総務課調査統計係が、教育庁総務課企画調査係に移り、新たに管理係が設けられた。主に庁舎維持管理と備品の保管管理および宿泊棟の維持管理を業務とする。教育研究部に教育工学研究室が誕生。時代の要請にこたえ教育工学に関する研修、研究に奮闘中。

## 教育相談室から 来所申込は電話一本で

昨年度の面接・治療状況は下記のとおりです。うち、来所件数200件、出張件数422件。今年度は、4月末日現在の在籍児は、幼児8、小学生42、中学生21、高校生等10、計81名です。悩む親に来所をおすすめください。電話申込で結構です。無料。

昭和49年度

知能 学業	言語 障害	神経 症	反社 会性	登校 拒否	夜尿 車酔	進路 適性	他	受理数 合計	面接 数
447	16	61	16	31	38	2	11	622	2061

## 全県児童・生徒理科研究発表大会について

この研究発表大会も、今年度で第10回目を迎えることになりました。これまで毎年、小学校約50題、中学校約30題、高校十数題の発表がありましたが、すぐれた内容の発表が多くなっています。幸いにも県内には、児童・生徒の研究を研究費の面から援助してくれる団体がありますので、これらも積極的に利用し、意欲的に研究してください。第10回大会の期日は次のとおりですが、詳しいことは後日実施要項でお知らせします。

小学校 11月5日(水)

中学校 11月6日(木)

高等学校 11月7日(金)

## 昭和50年度 所員・研究員の研究発表会の開催

- 期日 昭和51年2月3日(火)
- 発表者 荒川室長(経営)、進藤指導主事(教科)、品川指導主事・板垣研究員(教育相談)、佐藤研究員・鎌田研究員(教育工学)、室田指導主事・渡辺研究員(理科)、佐藤指導主事(技術・家庭)以上9名
- 日程 全体会と分科会の子定
- 刊行 研究紀要第7集に掲載する

## 編 集 後 記

50年度がスタートしてから、すでに三ヶ月が過ぎ、つゆの声が聞かれる頃となりましたが、教育現場と、より一層の連帯を求めつつ「教育センターだより」をお届けし、センターの事業を、御紹介致したいと思います。

## 教育センターだより 第15号

発行年月日 昭和50年6月16日

編集責任者 秋田県教育センター

秋田市仁井田字潟中島297の11